

昭和初期私鉄の遊園地事業について ——多摩川原遊園京王閣を例に——

須賀 友芽子

【要旨】

昭和初期、鉄道会社の沿線誘致策の一環として、遊園地開設ブームが起きた。京王電鉄株式会社の前身である京王電気軌道株式会社(以下、京王電軌)が手掛けた「多摩川原遊園京王閣」(以下、京王閣)もその一つだ。大規模な娯楽施設として「関東の宝塚」といわれるほど繁栄していたが、時代に翻弄されながら使用目的も変化し、1949年からは京王閣競輪場として利用されている。同時期に開園した向ヶ丘遊園など、近年まで残っていた遊園地もある中、なぜ京王閣は競輪場になったのか。

以上の問題意識のもと、本稿では京王閣に関する知見の積み上げを試みた。具体的には、開園当時から競輪場になるまでの京王閣の施設方針や周辺環境、京王電軌の経営状況、人々の遊覧目的などの変遷過程を調査した。そして京王閣が競輪場となった要因として、①京王閣独自の存在意義の変化、②京王電軌の経営や施設維持のための状況の変化の二点が関係しているという結論を導き出した。

【講評】

本論文は、なぜ多摩川原遊園京王閣は終戦後に遊園地として再営業することなく競輪場として利用されるに至ったのかという問いを設定し、文献調査により、(1) 京王閣独自の存在意義の変化 (2) 京王電軌の経営や施設維持のための状況の変化、の2点がその原因であることを明らかにしたものである。問題意識(リサーチクエスチョン)はきわめて明解で、当該問題意識に従って、社史を中心とした文献を丹念に渉猟しつつ論理が展開され、著者なりの検証結果も導出されている。やや雑な印象を覚える箇所もあるが、文献調査や論文執筆に費やした労力は、学部生の卒業論文として非常に高く評価できる。